

副詞と能願動詞と介詞との関係

On the Relationship between Adverbs, Auxiliary Verbs, and Prepositions

高橋 弥守彦
TAKAHASHI Yasuhiko

内容提要

一般来说，汉语的语序较为固定，副词、能愿动词、“介词+名词”等均可依据其词类的特征，放在谓词性词语的前面。而日语的语序则略显宽松，因此，受日语母语的影响，对于学习汉语的日本人来说，汉语句子的词语排列问题是个难题。

由于副词具有动词和形容词的特性，因此可以用于由副词构成的词语前面。能愿动词表示主体的情态，因此可以用于动词之前。介词用于名词之前，表示名词的种类。这些均为词类在句中的基本原则。但是，当这些词语用于同一句子里时该如何排列其顺序，日本人则往往难以判断。本文通过实例分析，明确其语序问题。

キーワード：品詞の体系 品詞の特性 副詞 能願動詞 介詞

目次

0. はじめに
1. 文中における副詞・能願動詞・介詞の各位置
2. 文中に副詞・能願動詞・介詞のうちの2品詞を使う場合
3. 文中に副詞・能願動詞・介詞の3品詞を使う場合
4. おわりに

0. はじめに

文は品詞の特性によって組み立てられ、文の内部で品詞の体系を作っている。品詞の体系によって作る文は、文法単位から見れば、単語と連語とによって作る。そのため、文中における副詞・能願動詞・介詞の各位置は一般に固定している。この3品詞の共通点は、それぞれの特性が異なるとはいえ、いずれも動詞や形容詞などの用言性語句の前に用いることである。

副詞は動詞と形容詞の特性を表すので、その前に用いる。また、動詞や形容詞を核とする連語であっても副詞の位置は同様である。能願動詞は主体の能力や願望を表すので、やはり動詞や形容詞およびそれらの作る連語の前に用いる。介詞は動詞や形容詞などの用言性の語句に対して、名詞や代詞を強調するために、「介詞+名詞/代詞」の構造で、動詞や形容詞およびそれらを核とする語句の前に用いる。

本稿では副詞・能願動詞・介詞が文中に用いられる場合の原則を確認し、このうちの2つあるいは3つが連用される場合について、どのような語順になるのかを調査し、その理由を明らかにする。

1. 文中における副詞・能願動詞・介詞の各位置

副詞・能願動詞・介詞の各位置は、それらの単語の有する各意味により文中で固定化し、一般には下記のように分類され用いられる。

1.1. 副詞の位置

副詞は動詞や形容詞の特性を表すので、それらの前に用いられる。語彙的な意味により、一般に次のように分類される。

[表1] 中国語の副詞分類表¹⁾

副詞	—	感性的な副詞：程度副詞“很、最、格外”・情態副詞“突然、渐渐、悄悄”・語気副詞“大概、简直、究竟”
		判断的な副詞：範圍副詞“都、只、一共”・頻度副詞“又、常、重新”・否定副詞“不、没、不必”
		時間的な副詞：時間副詞“正、在、才、马上、立刻”
		関連的な副詞：関連副詞“又…又…、越…越…、先…然后…”“(只要)…就…、(只有)…才…、(一)…就…”

[表2] 中国語の副詞と語句との関係²⁾

副詞	— 修飾 —	副詞の後に用いる語句の修飾（文頭、文内）
		副詞の前後の語句の意味関係からの修飾（文内）
	— 心的態度 —	副詞の後に用いる連語に対する心的態度（文頭、文内）

品詞の体系から見れば、副詞は一般に動詞や形容詞の特性を表すので、以下の文に見られるように、それらの前か、それらで作る連語の前に用いられる。

- (1) 妻又哭了。(『人民』89-5-101)
妻はまた泣いた。(同上)
- (2) 雨渐渐大了。(『人民』91-8-97)
雨はだんだん強くなってきた。(同上)
- (3) 阿浓觉得很对不起朋友。(『人民』94-1-93)
彼らに申しわけない、と阿濃は思った。(同上、94-1-92)
- (4) 显然，他不愿回答。(『人民』88-1-94)
彼は答えたくないのだ。(同上、88-1-95)

一般に副詞は動詞(例1)・形容詞(例2)・動詞連語(例3)・説明連語(例4)の前に用いられ、これらの語句の特性を表す。このうち、例(4)の副詞は文の形式「主体+出来事」から見れば、文頭に用いられているので、文副詞という研究者もいるが、やはり説明連語の前に用いられるとみなすほうがいだろう。

以下の文は、いずれも文中に副詞あるいはそれとみなせる語句が連用されている場合である。

- (5) 村里的人们也终于听到了孩子的说话声和“咯咯咯”的笑声。(『人民』88-12-107)
山里の人たちも、やっとその子の話し声やころころ笑う声を、耳にするようになった。(同上)
- (6) 她抬头一看，果然就有一把伞，一把绿伞的自动伞。(『人民』91-8-96)
頭をもたげて見ると、案の定かさがある。緑色の自動式のかさだった。(同上)

例(5)には“也”と“终于”の二つの副詞がある。“也”は前の文とかかわりのある「類同」を表すので、前に用いられ、“终于”は出来事“听到了孩子的说话声和“咯咯咯”的笑声”の結果を表すので、“也”の後、出来事の直前に用いられる。(6)には“果然”と“就”の二つの副詞がある。“果然”は出来事全体の心的態度を表すので前に用いられ、“就”は出来事“有一把伞”が早くからあることを表すので、その前に用いられる。

1) 高橋弥守彦(2006:172)の修正版である。

2) 国研(1991:45)では、日本語の副詞の機能として以下の3点を挙げている。

- ①動作・状態の様子を詳しく述べる機能
- ②話し手の気持・態度を述べる機能
- ③次に述べ立てる内容を何らかの形で示唆する誘導の機能

1.2. 能願動詞の位置

能願動詞は主体の能力や願望などを表すので、主体に備わっているものと見られている。そのため、主体の特性を表す動詞のなかでも主体の直後に用いられ、ヒトの態度・判断などのモダリティ³⁾を表す。

- (7) “那你要买什么？”爸爸妈妈异口同声地问。(『人民』88-2-97)
「じゃあ、何を買いたいの？」とパパとママ。(同上)
- (8) 一家人高高兴兴地过了一天，最高兴的要属桑园了。(『人民』97-4-87)
この日、みんなは一日中御機嫌だったが、中でも桑園が一番楽しげだった。(同上)
- (9) 有人提议：应该揍一顿抒情诗人，以平心中之气。(『人民』96-10-87)
この悔しさは、抒情詩人を袋だたきにしなけりゃ収まらないという人がいた。(同上)
- (10) 不行，我得等下去。(『人民』89-7-101)
いや、やはり待つべきだ。(同上)

上掲の能願動詞はいずれも動詞連語(「動詞+客体」三つの動詞“等下去”)の前に用いられている。たとえば、例(7)の能願動詞“要”は動詞連語“买什么”の前であり、両親が子供に対して言っているのだから、能願動詞“要”は待遇表現[～したい]が訳されている。しかし、相手が中学生以上であれば、待遇表現を避けて、[何をかうつもりなの]や[何をかうの]と訳されるであろう。(8)の“要”は話者の断定を表す身内型表現“最高兴的要属桑园了”の一部として使われているが、日本語は他人型表現なので、客観的に訳す[中でも桑園が一番楽しげだった]と訳され、“要”は減訳されている。例(9)(10)の“应该”“得”は「当然」の意を表すので訳されている。

1.3. 介詞の位置

介詞は、一般に客体を強調するために、介詞により客体を動詞や動詞連語(例11)の前に前置させる用法と一つの動詞が一つの客体しか取れないために、もう一つの客体(例12)を前出させる二つの用法である。

- (11) 我和堂妹打开旅行包，把一大蓝苦柚装了进去。(『人民』93-6-111)
ほくといとは旅行かばんをあけて、かごのザボンを詰めた。(同上)
- (12) 我从她皮兜里翻出一叠信来，果然都是同一个地址。(『人民』89-5-100)
妻のハンドバッグをさぐって、ひと束の手紙をとり出すと、やはり差出人の住所は皆同じになっている。(同上)
- (13) 老尤说着，从玻璃窗口把圆珠笔递到小胡的手上。(『講読』②p.82~83)
老尤はそう言いながら、ガラス窓の窓口ごしに、ボールペンを小胡に手渡した。(『講読』②p.89)

例(11)は「介詞“把”を用いる動詞連語」“把一大蓝苦柚装了进去”である。動詞連語“装了进去”に対し、“把一大蓝苦柚”を強調している。(12)は「介詞“从”を用いる動詞連語」“从她皮兜里翻出一叠信来”である。連動連語“翻出一叠信来”に対して、“从她皮兜里”を特定化している。(13)は(12)と同様「介詞“从”を用いる動詞連語」であるが、構造がさらに複雑“从玻璃窗口把圆珠笔递到小胡的手上”である。まず介詞“从”を用いて場所を特定化し選択連語“递到小胡的手上”に対して、“把圆珠笔”を強調している。

2. 文中に副詞・能願動詞・介詞のうちの2品詞を用いる場合

前節では、原則として文中に副詞・能願動詞・介詞のうち一品詞を使う場合の語順について、品詞の体系から分析した。本節では上掲の2品詞を使う場合について検討する。

3) 中国語では能願動詞(例9)なども動詞の一類なので、下記例文中の動詞“幻想”と同じように選択連語を客体として取ることができる。

一年下来，收入很不错，就盖了两间小瓦房，总幻想着娶个小寡妇。(『人民』89-7-99)

一年やって、いい収入になったので、二部屋の小さいかわら屋根の家を建てた。そして、三十すぎくらいの後家さんを嫁にもらうことをいつも幻想している。(同上)

2.1. 副詞と能願動詞の2単語を用いる場合

文中に副詞と能願動詞を使う場合の語順について検討する。両品詞は上掲の分析により、どちらも動詞の前に用いられるが、一般にはどちらが先に用いられるのかを検討する。

- (14) 刚落座, 大款即宣布, 只能呆一小时, 七时与一位客商有约, 且亲自驾了车, 不能沾酒。(『人民』93-9-111)

席についていきなり、金持ちが宣言した。ぼくは一時間しかいられないんだ、七時に客と商談の約束があるんでね。それに自分で車を運転してきてるんで酒はだめなんだ。(同上、93-9-110)

- (15) 她真想扑进他的怀里, 叫一声“我的大傻瓜!”(『人民』88-1-93)

彼の胸にとびこみ、彼女は「大バカさん!」と叫びたかった。(同上)

- (16) 既不能赢局长, 又不能让局长看出你是故意输的, 一定要输得自然, 输得天衣无缝。(『人民』95-2-99)

局長に勝っちゃいけないし、わざと負けを気付かれてもまずい。自然に負けたようにする。天衣無縫の負け方だな。(同上、95-2-98)

能願動詞は動詞の類なので、副詞は一般に能願動詞の前に用いられる⁴⁾。(14)(15)は能願動詞の後の選択連語“呆一小时、扑进他的怀里”が文の分析では客語⁵⁾となり、能願動詞が述語となる。(16)は使役動詞連語“让局长看出你是故意输的”の前に二つの副詞“又、不”と能願動詞“能”が用いられている。“既……又……”は呼応して用いられる副詞なので、“又”は前に用いられている。“不”は出来事“能让局长看出你是故意输的”を否定しているので、その前に用いられている。複雑な構造であっても品詞を用いる原則は同じである。

2.2. 副詞と介詞の2品詞を用いる場合

文中に副詞と介詞を使う場合の語順について検討する。両品詞は上掲の分析により、どちらも動詞の前に用いられるが、一般にどちらが先に用いられるのかを検討する。

- (17) 他不时被寒风呛得咳嗽着。(『講読』②p.44)

彼は寒風にむせて、ときどきせきこんでいた。(『講読』②p.50)

- (18) 小偷一个激灵, 赶快把钱包丢在车厢里, 苗秀捡起钱包塞给了懵懵懂懂的老人。(『人民』93-5-111)

スリはびっくり仰天、財布を床に落としてしまいます。苗秀はその財布を拾い、まだぼんやりしている老人に返してあげます。(同上)

- (19) 老局长临退时, 也曾向部里建议让龙处长接他的班。(『人民』88-10-95)

局長自身も退任にあたって、後任に竜処長を管轄の部に推せんしている。(同上)

- (20) 信寄出去了。我很快便把它忘却。(『人民』88-8-97)

ポストに入れてしまうと、すぐこの手紙のことなど忘れてしまった。(同上)

- (21) 仿佛有无数只小手在信封里捣鬼, 我好半天才把它拆开, 字很清丽, 一看就是女孩子。(『人民』88-8-97)

無数の小さい手が、封筒の中であやしうごめいているのでは?しばらくしてからやっと封を切る。きれいな字だ。ひと目で女の子と分かる。(同上)

4) 能願動詞が副詞の前に用いられる例文もあるようだが、今回の調査では、実例がなかったので、この分析は他稿に譲る。次の例文は聞き取り調査の結果である。

他能只闭上右眼, 却不能只闭上左眼。

彼は右目しかつぶれなく、左目はつぶれない。

5) 一般の文法書では例(14)の“一小时”を補語として扱っているが、補語は述語を意味的にどのレベルであるのかを表す文法単位なので、本稿では体言性の語句は客語として扱う。

例(17)は「介詞“被”を用いる動詞連語」であり、(18)は「介詞“把”を用いる動詞連語」である。ともに介詞を用いているものの動詞連語の一類である。連語は文法単位としては、単語と同様に扱われるので、副詞は形式的に見れば、介詞の前に用いられているが、実際はこれらの連語の前に用いられている。(19)は「介詞“向”を用いる動詞連語」であり、その前に副詞が二つ“也、曾”用いられている。この二つの副詞のうち前の副詞“也”は類同を表すので、前に用いられ、後の副詞“曾”は出来事の発生した時間を表しているので、出来事“向部里建议让龙处长接他的班”の前に用いられる。例(20)(21)は「介詞“把”を用いる動詞連語」であり、(20)は副詞“便”の前に時間の速さを表す“很快”が用いられ、(21)は副詞“才”の前に時間の長さを表す“好半天”が用いられている。どちらも構造がやや複雑だが、文法的には同じ構造である。

2.3. 能願動詞と介詞の2単語を使う場合

同一文中に能願動詞と介詞を使う場合の語順について検討する。両品詞は上掲の分析により、どちらも動詞の前に用いられるが、一般に同一文中に用いられる場合はどちらが先に用いられるのだろうか。

(22) “再外出，要把车票放好。”(『人民』89-10-100)

「こんど出るときは、キップはしっかりしまっておくんですね」(同上)

(23) 儿子！儿子！你可以把收录机再开大点。(『人民』88-8-101)

息子よ、息子よ、テープをもっと大きくしてもいいぞ——(同上)

(24) 她要把他们送进大学，使他们像父亲一样，但比父亲更有知识。(『講読』④p.111)

彼女は子供たちを大学へ進学させたかった。彼らの父親と同じように。いや、それ以上の知識を持った人になるように。(『講読』④p.117)

(25) 珍珍今年25岁，天生丽质，走在街上会被误认为是电影演员。(『人民』93-1-111)

珍珍は二十五歳、生まれつき美貌で、町を歩くと映画スターかと誤解される。(『人民』93-1-111)

能願動詞は動詞の一類なので動詞と同様に、その後に選択連語(例14, 15)を用いることができる。介詞は動詞の前に名詞を用いて名詞を強調する用法である。「介詞を用いる動詞連語」は文法的には動詞連語と同様の機能を果たす。それゆえ、例(14)や(15)と同様に能願動詞はその前に用いられ、語順は形式的には「能願動詞+介詞」(例22, 23, 24)となる。(25)は二つの出来事“走在街上”“会被误认为是电影演员”に分けられ、後の出来事に「能願動詞“会”+介詞“被”」が用いられているやや複雑な構造である。

3. 文中に副詞・能願動詞・介詞の3単語を使う場合

同一文中に副詞・能願動詞・介詞の三品詞を使う場合の語順について検討する。三品詞は上掲の分析により、いずれも動詞の前に用いられるが、一般にはいずれが先に用いられるのかを検討する。

(26) “再耐一阵，我不想被人说沾你万元户的光。到秋里……”(『講読』①-122)

「もう少し辛抱してください。人さまに、万元戸のあなたにあやかろうとしているなんて言われたくないわ。秋になってからでも……」(『講読』①-126)

(27) 他的名字居然会被一个素昧平生的姑娘知晓，他诚惶诚恐地点点头。(『講読』③p.118)

なんと、彼の名は一人の見知らぬ娘に知られていたのである。彼はおずおずしながらこっくりうなずいた。(『講読』③p.123)

(28) 还有更让她心醉的是，王强——她的丈夫终于要在今天回到她的身边来了。(『人民』88-7-98)

それにもましてうれしいのは、夫の王強がきょう、ようやく彼女のもとに帰ってきてくれる。(同上)

(29) 安安正好从这里走，他本想把小毛抱回家，但一听，小毛在“妈呀——妈呀”的喊叫。他扭头就走。(『人民』89-7-99)

ちょうどそこへ安安が通りかかった。抱いて家へ連れて行ってやろうと思っていたのだが、「お母さん、お母さん」とわめいているのを聞くと、顔をそむけて行ってしまった。(同上)

- (30) 我们永远也不要被生活的烟尘所吞噬, 不要丢弃支撑人生奋发的杠杆, 要像化学分子中的自由元素一样…… (『講読』④p.63)

われわれは、永遠に生活の中に飛び交ううちに呑み込まれてはならない。人生に向かって奮起するのに必要なことを捨ててはならない。化学分子の中にある自由元素のようにならねばならない…… (『講読』④p.69)

上掲の文は、原則としていずれも一つの文中に副詞・能願動詞・介詞の三品詞がそれぞれ用いられている場合である。能願動詞は動詞の一類なので、例(14)や(15)と同様にその前に副詞を用いる。介詞は「介詞を用いる動詞連語」の先頭に用いられているだけであり、全体としては文法的には動詞連語と同じなので、その前に「副詞+能願動詞」が用いられ、「副詞+能願動詞+介詞」(例26~29)の語順となる。(30)は副詞を二つ“永远、也”用いている文である。一般には“也”は類同を表すので、例(5)のように、前に用いられるが、時間を表す副詞“永远”は永遠にその後の出来事の類同を表すので、時間副詞“永远”が類同を表す“也”の前に用いられている。

4. おわりに

本稿では同一の文中に副詞・能願動詞・介詞の三品詞を使う場合の語順について検討した。この三品詞はいずれも動詞や形容詞の前に用いられるのが共通点であり、同一文中にこれらの品詞が多く用いられるほど、複雑な構造の文となる。これらの品詞が同一文中に二つ以上用いられる場合は、どのような理由により、どの品詞を先に用いるのかなどは、語感のない日本人にとって難しい問題である。

このうちの二品詞「副詞と能願動詞」「副詞と介詞」「能願動詞と介詞」を同一文中に用いる場合の語順は、上記に述べる各品詞の特性により語順がきまる。三品詞「副詞、能願動詞、介詞」を文中に用いる場合も、上記に述べる各品詞の特性により、語順がきまる。また、副詞はしばしば同一の文中に二つ以上用いられる場合(例16, 19, 30)もあるが、それも各副詞の有する特性により語順がきまることが上掲の分析と検討により明らかになった。

言語資料

1. 『人民中国』ショートショート 人民中国雑誌社 1988~1997
2. 『中国語学講読シリーズ』①~⑥ 北京外文出版社 1991

参考文献

日本語文献

1. 相原茂 石田知子 戸沼市子 (1996) 『Why?にこたえるはじめての中国語の文法書』 同学社
2. 郭春貴 (2001) 『誤用から学ぶ中国語』 白帝社
3. 興水優・島田亜美 (2009) 『中国語わかる文法』 大修館書店
4. 国立国語研究所 (1991) 『副詞の意味と用法』 大蔵省印刷局
5. 鈴木康之 (2000) 『日本語学の常識』 海山文化研究所
6. 高橋弥守彦 (2006) 『実用詳解中国語文法』 郁文堂
7. ————— (2011) 『中日対照言語学概論—文法編 (試行本) 一』 日本語文法研究会
8. ————— (2017) 『中日対照言語学概論—その発想と表現—』 日本僑報社
9. 日本語文法学会編 (2014) 『日本語文法事典』 大修館書店
10. 松岡榮志・古川裕 (2004) 『現代中国語総説』 三省堂
11. 森山卓郎 新田義雄 工藤浩 (2000) 『日本語の文法3 モダリティ』 岩波書店
12. 李臨定著 宮田一郎訳 『中国語文法概論』 光生館
13. 呂叔湘主編 牛島徳次監訳 菱沼透訳 (1992) 『中国語用例辞典』 東方書店

中国語文献

1. 白晓红 赵卫 编著 (2007) 《汉语虚词15讲》北京语言大学出版社
2. 岑玉珍 主编 么书君 副主编 (2013) 《汉语副词词典》北京大学出版社
3. 丁崇明 (2009) 《现代汉语语法教程》北京大学出版社
4. 高顺全 (2012) 《多义副词的语法化顺序和习得循序研究》复旦大学
5. 李德津 金德厚 (2009) 《汉语语法教学》北京语言大学出版社
6. 李晓琪 (2005) 《现代汉语虚词讲义》北京大学出版社
7. 卢福波 (2011) 《对外汉语教学实用语法》北京语言大学出版社
8. 陆庆和 (2006) 《实用对外汉语教学语法》北京大学出版社
9. 陆庆和 黄兴 (2009) 《汉语水平步步高 副词》苏州大学出版社
10. 罗耀华 (2015) 《副词化、词汇化与语法化——语气副词探微》华中师范大学出版社
11. 麻彩霞 (2013) 《现代汉语“相对程度副词+动+宾”发展演变研究》
12. 人民教育出版社中学语文室 (1984) 《中学教学语法系统提要 (试用)》人民教育出版社
13. 孙德金 (2002) 《汉语语法教程》北京语言大学出版社
14. 张旺熹 (2015) 《现代汉语虚词的认知与功能研究》中国书籍出版社
15. 张道生 (2004) 《现代汉语副词探索》学林出版社
16. 张道生 主编 葛佳才 宗守云 副主编 (2015) 《汉语副词研究论集》第二辑 上海三联书店
17. 张则顺 (2015) 《现代汉语确信副词研究》中国社会科学出版社
18. 褚俊海 (2012) 《汉语副词的主观化历程——指示、限制、关联》湖南师范大学出版社